

神奈川県立金沢養護学校



学校だより

第 129 号 平成 29 年 12 月 20 日

教頭 佐藤浩栄

共に学び共に育つ

2学期は、たくさんの行事や学習が行われました。校外学習や遠足、宿泊学習、修学旅行、そして学校全体で取り組んだ金沢フェスティバルと校内外にわたる取組が活動的に、積極的に行われました。校内においても校外においてもこのような機会は、とても大切なことだと思います。それは、学校で行われている教育活動を校外で発揮し、そのことがどうだったのかを知る機会になるからです。校外学習は、特に日頃取り組んでいる授業が社会の中でどう生かされたかを知る機会となります。上手く生かすことができなければ、その要因を考え学校で取り組み直すことをすればよいのです。修学旅行にいたっては、学校行事の一大イベントで「楽しい思い出」にするための準備が必要となります。3年間の学校生活の集大成となるわけですから、日々の積み重ねがとても大事になります。

話はかわりますが、神奈川県では昭和59年（1984年）頃から「共に学び共に育つ」ことを目指し、障害の有無にかかわらず子ども一人ひとりの教育的ニーズに基づいて必要な教育を適切な場で行う教育の実現を推進してきました。「共に学び共に育つ教育」は、子どもの学ぶ場の実現を目指すだけでなく、子どもや保護者、地域の皆様から「特別支援教育とは何か」「生きるとは何か」など教育や人間の本質を学び共に育っていくという考え方でもあります。先人の中には、「障害児教育は、人間とは何かを考える学問である」と述べた方もいます。私は、これまで生きてきた価値観や見方や考え方では通用しないことを体感しながら、この教育に携わってきました。他人を変えようとするのではなく、自分を変えなければならないことを。

私たち教員は、方法論や指導のあり方にとらわれ過ぎることがあります。この1年間、目の前にいる子どもたち、保護者、地域の皆様にどれだけ耳を傾け、気持ちを聞くことができたでしょうか。そして私たちは、そこから何を学んだのでしょうか。1年を振り返るこの時期、是非自分自身に問いかけてみたいと思います。皆様、良いお年をお迎えください。

